

# 藁と布織りを混合した民芸雑貨の制作 －美術館のための造形ワークショップ開発III－

小谷 充\* ・ 藤田英樹\* ・ 上野小麻里\*\*

Mitsuru KOTANI・Hideki FUJITA・Saori UENO

Creating Folk Art Crafts that Combine Straw Weaving and Fabric Weaving

－Development of Art Workshops for Museums III－

## 要 旨

本研究では、美術館での実施を前提とする「藁と布織りを混合した民芸雑貨の制作活動」を独自に開発し、造形ワークショップの実践に基づいて、開発の過程で得られた知見や参加者支援の方法などを明らかにした。本ワークショップは、地域に根付いた藁細工と古布を裂いて再利用する裂織を混合し、ウォールポケットを制作する造形活動である。開発の要点となる五項目（①簡易織り機の開発、②藁の選別、③布の裏打ち、④混合織りの指導方法、⑤藁編みの指導方法）を抽出し、実践の状況をタイムライン（発話計画）と図版によって経時的に開示した。実践結果として、簡易織り機に関する知見と展開の可能性、藁の準備や裏打ちした布の代用など本活動を再現する場合の簡略化のポイント、さらに藁と布の混合織りの可能性について言及した。

【キーワード：中学校美術科，図画工作科，藁細工，裂織，簡易織り機】

## I はじめに

### 1 研究経緯と目的

本研究は美術館における造形ワークショップの実践に基づいて、その開発の過程で得られた知見や参加者支援の方法など、実施に関する具体的な知見を明らかにするものである。

島根県立美術館は島根大学教育学部との連携により、毎年、夏季の企画展またはコレクション展に関連した造形ワークショップを開催している。本事業は、美術館での展示内容に関連した造形体験を参加者へ提供することで、素材や技法等の理解を促し、鑑賞のポイントを明示する教育普及を目的としている。大学教員及び学芸員の指導のもと、美術教育専攻3年生が半期週2回の演習で試作品や道具の検討、参加者支援や発話の計画を行い実践する。平成14年度から取り組んでいるワークショップの造形領域は多岐に亘り、独自性の高いプログラムを開発したものも多く、これまでの開発事例として、彩色石鹼の制作や色チョークから生成した水彩絵具によるパネル制作の造形活動をそれぞれ報告している。<sup>1)</sup>

### 2 対象ワークショップと開発の概要

第三稿となる本稿では、企画展「民藝 手仕事の美」展（島根県立美術館，平成24年7月27日～9月17日）の関連企画として実施した「職人技を手に入れよう！わらで手作りウォールポケット」（平成24年8月11日～14日各日2回，各回16名126名参加，島根県立美術館アートスタジオ）を取り上げる。

### ①題材の概要－島根の民芸について

民芸は柳宗悦、河合寛次郎、浜田庄司の三人の創始者によって生み出された美の考え方で、名もない工人たちが作る実用的工芸品に美しさを見出し、「民衆的工芸＝民芸」という言葉が作られた。島根県では〈民芸運動〉の一環として、昭和6年に「島根工芸診察」と称した柳宗悦による民芸発掘の旅が津和野から安来にかけて行われ、県下の優れた民芸品が選ばれている。そうした経緯もあって、島根・鳥取の山陰両県は民芸運動が活発に行われた地域として全国的にも注目されている。<sup>2)</sup>

### ②題材の概要－裂織について

裂織（さきおり）は古くなった布や着物を細かく裂き、それを緯（よこ）糸として新たな布を織る伝統技法である。寒冷な気候のため綿花などの繊維製品が貴重であった江戸時代中期の東北地方を端緒とする技法であり、北前船により流通した木綿の古布を貴重品として使い切る文化の中で発展した。島根県東部や石見地方では、昭和四十年代までツツレやツツリと呼ばれる仕事着や防寒着として裂織の布が使用されていたことが松尾（2023）の調査により報告されている。<sup>3)</sup> また近年では、必ずしも古布を素材とするとは限らず、染め方や裂き方に工夫を凝らした創作活動として見直されている。

### ③制作物（成果物）の概要

対象ワークショップでは、裂いた布と藁を織ったウォールポケットを制作する。島根県では、古くはたたら製鉄の文化と共に炭を運ぶための藁細工が盛んに行われており、農家の冬仕事として、また、出雲大社の大注

\* 島根大学学術研究院教育学系

\*\* 島根県立美術館学芸課

連縄に代表される神事や祝事を目的として伝承されてきた。しかし、藁を編むことのみによって成立する造形には相応の訓練が必要になり、手先の器用さが求められることになる。小学校4年生を参加者のボリューム層として想定する美術館のワークショップでは、限られた時間で成功体験を味わわせる活動とするにはハードルが高い。

そこで加工を容易にするとともに、二つの素材による美しさや華やかさを企図して、布と藁の混合織りを実践することとした。藁に裂き布を織り込む事例は東北地方に伝わる背負子（背負い袋）などに見られるが、強度を優先するそれとは織り方が異なる。そもそも製織は経（たて）糸と緯糸を直角に交差させ、所要の布を折り上げる。その際、経糸が構造を保持し、緯糸が面を形成するので、本来の裂織では比較的新しく丈夫な糸を経糸に用い、古布を緯糸に使用することで、修復を前提とした再利用を行なっている。本活動では、強度よりも簡易な加工を優先して、経糸に裂いた布、緯糸に藁を使用している。

織り上がった布と藁は、藁を所定の長さに切り揃え、切り口を裏打ちした布で覆い、成形する。この切り口の処理は、藁細工による伝統的な雪履（雪靴）の造形を参考にしているが、これも強度や耐水性を要しないことから簡易化の工夫を行なっている。成形は、織り機から外した裂き布を上下で縛り一方の辺を接着した「袋タイプ（ペン入れを想定）」と、長辺五分の一程度の位置で折り返して両端を接着した「ハガキタイプ（ハガキやカード入れを想定）」を準備し、参加者が選ぶ。【図1】

最後に壁面へ取り付けための取手を、藁の三つ編みによって作成し、本体に結びつけて完成とする。<sup>4)</sup>

## II 本ワークショップ開発の要点

### 1 簡易織り機の開発

一般的に、複数列の経糸を固定する構造を有していれば、織り機を用いて成し、簡易に布織りの体験が可能である。比較的多く利用されているのは、木枠の両端に釘やピンを一定間隔で打ち経糸を固定するものであるが、本活動では予備を含め25台の織り機を一度に使用するため、木枠の両端に一定間隔で切り込みを入れ、布を挟み込んで固定する方法を採用している。この場合、使用できる布の厚さの許容範囲は狭いが、電動糸のことで木材を加工できる環境があれば、織り機を低コストかつ省力で量産することが可能である。

こうした既知の構造を用いながら、本活動に特化した簡易織り機を開発した。その要点は第一に、織り機の横幅が「袋タイプ」の縦寸、「ハガキタイプ」の横寸に対応して決定していること。このことにより、児童が長さを測ることなく、織り上げた布と藁を最小限の加工で仕上げるができる。第二に、裂き布を設置する切り込みの奇数列を青、偶数列を赤のマーカーで着色し、児童が理解可能な発話計画と対応させていること。第三に、藁を織り込んで生成する面に必要な高さ、さらに藁の端を切り落とす補助線（ガイドライン）をあらかじめ織り

機に記載していること。これにより、平易な発話と実演で児童でも必要な織りが可能となる。設計の詳細は図を参照されたい。【図2】

### 2 藁の選別

藁は一本が複数枚の皮（袴）と芯（稈）とで出来ており、細工に適した綺麗な皮を抽出する必要がある。本活動の企画段階において、松江市内で藁細工の指導を長年経験されている方の助言を得た。その手順は、(a) 節をハサミで切り落とし、(b) 外皮を剥ぎ捨て、(c) 内側の綺麗な皮（上袴）を抽出し、(d) 芯（上稈）を抜く。身近な稲藁から材料を抽出するこの工程は、民芸の特徴を端的に理解させてくれる重要なパートである。しかし、一人当たりの制作に必要な藁が40本程度なのに対し、短時間で抽出できる本数は10本程度である。そのため、参加者一人当たり30本程度の選別は事前準備しておく必要がある。本活動ではおよそ1000本を準備して、開催期間中に消費量に合わせて追加している。【図5】【図6】

### 3 布の裏打ち

藁の切り口を覆うための布は、制作物が耐荷重や耐水の必要がないことから両面テープで接着する。この際、布のみでは十分な接着力が得られないので、あらかじめ薄紙で裏打ちし、両面テープを貼り付けた専用の「布クロス」を準備する必要がある。これは書籍の装丁用材料に用いられる布クロスの制作工程を参考にしている。<sup>5)</sup>

具体的には、(a) A3サイズ程度の布に水をよく吸わせ、ガラス板に平らに伸ばして貼り付ける。(b) でんぷんのかきと木工用ボンドを1:1で混ぜ、水で薄く溶いて刷毛で塗る。(c) そこに水を吸わせた薄紙を貼り、刷毛で押さえながら平らに伸ばし、そのまま乾燥させる。(d) 乾燥した大判の布クロスを200mm×30mm程度に裁断し、両面テープを貼っておく。これが一人当たり2本、選べる場合は参加者数の1.2倍程度を準備しておく必要がある。本活動では300本（150人分）を準備している。

### 4 混合織りの指導方法

織りの活動は、全ての参加者が3段程度の藁を織れば手順を把握でき、繰り返して面が形成されるにつれ、その魅力を味わいながら作り進めることができる。課題はその最初の織りをどのように指導するかに尽きる。

織りの手順は(a) 織り機に裂いた布を経糸として12本設置し、(b) 2本の藁を手を持ち、(c) 青列（奇数列）の布の下を通して手前に引く。(d) 続けて2本の藁を赤列（偶数列）の布の下を通して手前に引く。(e) これを交互に繰り返す、所定の高さまで織り進める。2本一組の藁を緯糸とするのは面の腰を出しながら作業を早めるため、1本だと所定の高さまで織り進めるのに時間を要し、仕上がりが波打って均質な面を作り難い。また、交互に挿入した藁を手前に引く際に、適度に締めることでよりしっかりと面が形成される。【図12】【図13】

本ワークショップでは、まず大型模型（縦1000mm×

横500mmで列の色分けも実物と対応)を使ってメインスピーカー(全体説明や進行、時間管理を担う)が説明を行い、後にグループリーダー(手元を見せる制作班ごとの説明、個別のコミュニケーションを担う)が実演する。参加者は2段めまでをグループリーダーと合わせて織ることで手順を確認する。【図10】【図11】

### 5 藁編みの指導方法

整形した作品に取り付ける取手は、織りに使用する藁を三つ編みにし、細い縄状に加工したものである。藁はそのままでは固く滑るので、取手用の藁はあらかじめ水につけて湿らせておく。参加者には3本の藁の上端をクリップで挟んだものを配布し、クリップごとテーブルにテープで固定して編ませる。手順は(a)3本のうち右側の藁を中央に折り返すように移動させ、(b)左側の藁を同様に中央に折り返すように移動させる。この際、藁を軽く引きながら(編むというよりも)繊維を折るイメージで進めると綺麗に仕上がる。これを繰り返して200mm程度の細縄を作る。本ワークショップでは大型模型で説明した後、各班で個別に支援を行なっている。テーブルに固定した湿らせた藁の上端が外れやすくなっているため、保護者や支援者が対面に座って上端を固定するとさらに編みやすい。【図17】【図18】

## Ⅲ 本ワークショップの実践

本ワークショップの活動はスタッフの担当が変わっても、常に同じ質の活動を提供できるよう、厳密なタイムラインを作成して実施した。これは児童が理解可能かつ原理的に誤りのない、簡潔で効果的な発話や用語の統一を目指して、複数回のリハーサルによって精緻化したものである。したがって、造形ワークショップ開発の中核となるのがこのタイムラインであると言える。本章では、タイムライン全文と対応した図版をもって実践状況の開示とする。誌面の都合上、本稿の末尾に掲載するので参照されたい。

## Ⅳ 結果

本事業は中学校美術科教員の養成プログラムに位置付けているので、そのままの形式で再現するにはやや難易度が高いが、今回の実践を通して、他の美術館や小中学校での再現に向けたいくつかの知見を得た。

第一に、簡易織り機の準備について、汎用性を高めようとするれば加工の難易度は上がるが、制作物(成果物)を限定することで量産が可能になること。本活動のために準備した木材加工の織り機は堅牢で恒久的な使用に耐えられる。あらかじめ公立学校1クラス分程度を制作しておけば、美術館での継続的なワークショップや連携校への貸し出しなど、新たな展開が期待できる。

第二に、藁の準備について。2時間半の活動に収めるには事前に藁の選別が必要だが、30分ほどの延長を許容できるなら参加者が全て選別することは可能である。

また、小中学校での活動とする場合、授業時数の単位で工程を段階的に進めることも可能である。

第三に、裏打ちした布の代用について。小中学校での活動であれば、布の裏打ち体験そのものが有意ではあるが、一度の制作で複数人分が出来上がるので、グループで大判の布クロス一つを作る配分が適当であろう。また、簡易に行う場合は、裏透けしない和柄の和紙を代用して専用の紙テープとしても問題ない。

最後に、藁と布織りの混合について、その可能性を指摘しておきたい。本活動では、地域に根ざした藁細工の加工体験を見据えながら、その難易度を下げつつ造形性を高めるために、裂織の技法を混合するに至った。藁を素材とする制作は、稲作の行われる地域では現在でも何らかの形で継承されており、民芸の活動を簡易に体験できる有意な題材である。また、古布を再利用する裂織の文化もまた、持続可能性という新たな意味付けがなされ、体験型学習に適した題材であると言える。

### 【謝辞】

本ワークショップの開発に際して、島根大学学術研究院教育学系・川路澄人教授にはリハーサルに参加者としてご協力・ご助言を頂いた。本ワークショップの企画・実施を担った島根大学教育学部美術教育専攻学生諸氏(石原翔太、糸原加奈子、井上沙耶、下谷幸子、滝澤茜、田中由紀、田野さつき、月森香愛)へ感謝の意を表す。

### 【註】

1) 小谷充、藤田英樹、野村真弘、上野小麻里「減法混色及び色彩構成による彩色石鹸の制作活動：美術館のための造形ワークショップ開発I」、『島根大学教育学部紀要(教育実践研究)』第57号、島根大学教育学部、2024、pp.73-83

野村真弘、藤田英樹、小谷充、上野小麻里「色チョークによる水彩絵具を用いたアートパネル制作：美術館のための造形ワークショップ開発II」、『島根大学教育学部紀要(教育実践研究)』第58号、島根大学教育学部、2025、pp.107-122

2) 島根県立美術館編集『民藝 手仕事の美』、島根県立美術館、2012

3) 松尾優平「島根県における裂織・紙布・藤布の分布(1)」、『萩博物館調査研究報告』第19号、萩博物館、2023、pp.1-7

4) 「織り」と「編み」の用語について、織りは本文中で説明した通り経糸と緯糸を直角に交差させるのに対して、編みは一方向の糸(繊維)を絡ませる技法上の違いと説明できる。藁は織るものではなく「編むもの」として慣用されるが、本稿では技法に特化して「混合織り」「藁編み」と呼び分けることとした。

5) 布クロスは書籍の装丁用材料の一つで、製本された書籍の表紙を補強するための、織物を基調とした生地に薄紙で裏打ちしたもの。



**事前** 「こんにちは。このワークショップにご応募していただいた方でしょうか。お名前をお願いします。では、あちらのスタッフが席へ案内します。机にあるペンで名札に名前を書いてお待ちください。荷物がある場合は、こちらの荷物置き場を利用してください。」

#### ▼はがきタイプと袋タイプ、使用する布を決めさせる

(参加者が来たと)

グループリーダー（以下、GL）「今日の活動では、このような壁掛け小物入れを作ります。（見本を見せながら）ここにはカードの入るはがきタイプとペンなどが入る袋タイプの2種類があります。皆さんはどちらを作るか考えてみてください。また、このように織り込んでいる布と端の2種類を使うので、ここにある5種類の中から、好きな布を2種類選んでみてください。あとで変更することもできます。」

(始まる前に)

GL「選んだ布はこちらのかごに入れてみてください。」

0:00

#### ▼挨拶

・全員、開始時刻になったら参加者の前に一列に並び  
メインスピーカー（以下、MS）「こんにちは。本日は『職人技を手に入れよう！わらで手作りウォールポケット』へご参加いただきありがとうございます。全体の進行役を務めます〇〇です。」「グループリーダーの〇〇です。」「〇〇です。」「このメンバーで皆さんの活動をサポートしていきます、よろしくお願いします。」「よろしくお願いします。」

#### ▼導入【素材体験】

・GLはそれぞれの席に戻る。

MS「では皆さん、今日の主役はこの藁です。皆さんは藁がどのように出来ているの知っていますか。かごの中に藁が入っているので、手にとってみましょう。皮をむいてもいいですよ。では始めてください。」

MS「この穂の先は何かを取った跡がありませんか。ここには何が付いていたでしょう。」

MS「ここにはお米がついていたんです。お米を作っている家ではたくさんの藁があったので、その藁を使ってこういうものを作っていました。」

(スタッフA 藁展の写真提示)

MS「これは藁履といって雪の日に使う長靴です。昔は島根県でも使われていました。最近ではなかなか見ないものですね。この色の付いている部分は布です。藁と一緒に織ると、布が模様のように出てとても綺麗ですよ。このように日常で使うものを身近な素材で作る、より美しく工夫したものを〈民藝〉と呼んでいます。」

MS「今日はこの藁履のように藁と布でウォールポケットという壁掛け小物入れ（見本を見せる）をつくりましょう。」

#### ▼活動の流れ説明

MS「では本日の流れを説明します。こちらを見てください。まず①織りやすいように綺麗な藁だけを分けます。②織り込んでいく布を裂きます。③藁と布を織ります。④ポケットの形にします。最後に⑤鑑賞会、という流れでおよそ2時間半の活動です。」

・GL、藁コンテナの用意

0:05

#### ▼藁の選別

MS「ではさっそく藁を分けていきましょう。藁には皮がたくさん付いています。何本あるか数えてみますね。1、2、3…（実演）芯以外で皮は3枚くらいあります。この芯の一枚外側の藁を見ると、硬くて綺麗です。今日はこの皮だけを使いましょう。では、グループリーダーさんと一緒に分けてみましょう」

GL「ではかごの中のはさみを取って、このかごから藁を一本持ってください。藁には硬い節が二つ三つあります。一番上の節を探しましょう。その節の少し上を切って下の方は床に落としておきましょう。次に中の芯を抜いたら芯も床に落として、残った皮をかごに入れておきます。15分あるので40本を目標に分けましょう。分かなければ気軽に聞いてください。それでは始めてください。」

・GLは時間を見て遅れている子に声をかける。

・藁の先が人に当たらないよう注意させる。

(状況に応じて)

・節は皮の中に隠れているかもしれませんよ。

・はさみで切った時に藁が飛ばないように、上を持って切りましょう。



【図3】ウォールポケット（袋タイプ）の完成見本



【図4】身近にある素材と〈民芸〉をつなげる導入部分



【図5】藁の選別



【図6】藁の節を切り落とし綺麗な皮を取り分ける

【表1】タイムライン1

- ・切ったら中の芯をスツと引き抜いてください。
- ・芯は捨てておいて、皮をかごに入れておいてください。

MS「残り1分です。」

MS「そろそろ時間になるのでここで藁を切るのはやめましょう。机の上や服に藁が付いている人は床に落としておきましょう。手が汚れた人はウェットティッシュを使ってください。では、一旦手を置いて前を向いてください。」

- ・GL、ウェットティッシュ用意、藁回収。
- ・スタッフ、床をはく。

0:23

#### ▼布を裂く説明

MS「これから織り込む布を帯のように裂いていきます。今日は手で裂きますが、いきなり手で裂くのは力があるので、はさみで切り込みを入れます。このようにテーブルに黄色いテープが貼ってありますね。布が縦長になるようにおいて、テープの幅に合わせて切り込みを入れておきます。ピッタリその幅でなくてもいいですよ。」

- ・スタッフ A 説明パネル
- ・スタッフ B 実演補助

MS「次に切り込みのところから手で勢よく裂きます。一つ切り込みを入れてから裂いた後、次の切り込みを入れます。この布の帯を12本作ります。では始めてください。」

#### ▼布を裂く

GL「では、最初の一本は私と一緒に裂いてみましょう。まず、縦長になるように布をおいてください。布の端をテープに合わせてはさみで切り込みを入れましょう。次に布を勢よく裂きます。これで一本出来ました。このようにあと11本裂きましょう。」

(状況に応じて)

- ・全部切り込みを入れずに、切り込みを入れて裂いてから次の切り込みを入れる、というのを繰り返してみましょう。
- ・切り込みは少しでいいですよ。
- ・難しければペンでしるしをつけてから切ってみましょう。

- ・切り込みが斜めにならないよう注意する。
- ・各人にペンは用意しておく。
- ・GLは4人が終わったことを確認し、MSへ知らせる。

#### ▼布の設置

MS「12本出来たようですね。ではこちらを見てください。これは織るための道具です。」

- ・スタッフ A、大型織り機（模型）の提示。
- ・スタッフ B、MSの発話に合わせて実演。

MS「先ほどの布をこの切り込みにギュッと挿します。赤の切り込みに挿した布は反対側の同じ所にある赤の切り込みに挿します。上と下から出る布は同じくらいの長さにししましょう。これが縦糸になります。そこまで出来たらグループリーダーさんに見てもらってください。」

- ・GL、織り機配布。

GL「では織り機に布を挿してみましょう。裏表は合わせなくてもいいですが、参考作品を見て、合わせたほうがいいと思った方は裏表を合わせてください。12本挿せた人は私に教えてください。では始めてください。」

- ・GL、出た布の長さを確認。

GL「(長さを確認した後)では、布が動かないように、このように枠から出た布を隣同士で軽く結んでおきます。出来たらもう片方も結んでおきましょう。」

0:54

#### ▼織りの説明

MS「一旦手を止めてこちらを向いてください。それでは藁と布を織っていきましょう。後ろの席の方は見える場所に移動してください。」

- ・GL、移動させる。

MS「ではいよいよ織りに入りますが、2つ大切なポイントを押さえていけば簡単に藁が織れてしまうんです。」

- ・スタッフ A、大型織り機を支える。
- ・スタッフ B、実演。

MS「1つ目のポイントは、1列に藁を2本使うことです。今回はこの藁2本を1セットとして織っていきます。」

MS「まず一段目は、青のしるしのついた布の下だけを通します。出来たら下まで下げておいてください。ここから2つ目のポイントです。二段目はさっき飛ばしていた赤のしるしのついた布の下を通し



【図7】大型模型を使った裂き布の説明



【図8】布を裂く



【図9】編み機に布を設置する



【図10】大型模型を使った織りの説明

【表2】タイムライン2



てください。』

MS「このように、一段目は青の布の下だけを、二段目は赤の布の下だけを通していくと、一段目で下にある布が二段目では上に来ますね。このように上下上下と交互に編んでいくことが重要なポイントになるんです。』

MS「では机に戻って、グループリーダーさんと一緒に作っていきましょう。』

#### ▼織り

GL「それでは、まずは私と一緒に織ってみましょう。最初のポイントは藁を 2 本使うことでしたね。では、藁を持ってください。一段目は青の布の下を通してください。このとき藁は織り機より外側に出るようにします。これで一段目が出来ました。出来たら、指できっちりとかまを下げておいてください。』

GL「さて、ここから二つ目のポイントでしたね。二段目は一段目とは逆に赤の布の下を通します。』

・二段目までは全員同時進行。

GL「では、ここから自分のペースで織っていきます。足りない藁はここから取ってください。分からないことがあったら私に聞いてください。織り機に目印がついているので、今から〇〇分までに、そこまで織りましょう。ではどうぞ。』

・MS、鑑賞活動に向けて話しかけながら観察と支援。

・スタッフ、必要に応じて支援。

MS「織りの時間はあと半分です。』

#### ▼袋タイプへの変更を促す声かけ

・10 分前にチェック（はがきタイプで遅れている場合は、袋タイプへ変更を促す）

MS「どうですか、どこまで編めましたか？」

（はがきタイプで遅れている場合）

MS「〇〇さんははがきタイプでしたね。はがきタイプはしるしのところまで織らないと作れないので、あと 10 分、少しスピードアップしてしるしのところまで織ってみてください。それでも足りなかった場合は、少し小さくなります。袋タイプにも出来ますがどうしますか。』

1:27

#### ▼端の処理

MS「では、時間になりましたので一旦手を止めてください。ここからは織ったものをそれぞれに形にしていけます。グループリーダーさんお願いします。』

GL「藁を整えて端の処理をします。最初に選んだ端の布を使いますが、変えたい人はいますか？」

#### ▼藁をそろえる

GL「端を整えます。藁は織り機に書いてある線にはさみを沿わせ、布を切らないよう注意して、藁だけを切ってください。どうぞ。』

・切りすぎに注意、きちんと注視する。

#### ▼裏打ち布貼り

GL「次に、端の布を貼っていきます。布を縦にこのように半分に折ります。折り目がついたらテープを剥がして、端を挟むように貼りますが、まず藁の下に半分を入れて藁をしっかりと押し付け、くっつけてください。』

・実際にやってみせる。随時支援。

GL「出来たらもう半分に上に折り返して貼ります。ではどうぞ。』

GL「では織り機から隣り合った 2 本の布をはずし、藁の近くで結びます。はがきタイプは 2 回しっかりと結び、袋タイプは 1 回だけ結びます。出来たら隣も同じように 2 本はらずして結びます。残りも全て同じように結んでください。ではどうぞ。』

#### ▼成形

（袋タイプが終わったら）

GL「袋タイプは半分に折り返し、両面テープでくっつけます。出来たらクリップで留めておいてください。』

（はがきタイプが終わったら）

GL「はがきタイプは下から 3 cm ぐらいのところまで折り返し、両面テープで留めます。出来たらクリップで留めておいてください。』

・全員が出来たことを確認して次の指示。

（袋タイプ）

GL「袋タイプは、上と下の布を 2 本ずつ見つけ、その 4 本で 2 回結んで、固結びにします。順番に全て結んでください。どうぞ。』



【図11】 織りの実演指導



【図12】 織りの状況 1



【図13】 織りの状況 2



【図14】 藁の切り揃え 1

〔表3〕 タイムライン 3

(はがきタイプ)

GL「袋タイプが出来るまで少し待っていてください。はみ出ている糸などを綺麗に整えてもいいですよ。」

GL「はがきタイプも袋タイプも余った布と端の布ははさみで切り揃えてください。それが終わったらクリップもはずしておきましょう。これで本体部分は完成です。」

2:04

#### ▼取手の取り付け (三つ編みの説明)

MS「一旦手を止めてこちらを向いてください。」

・スタッフ、三つ編み用藁と芯を水につける。

MS「最後にウォールポケットの取手を作しましょう。取手は藁を三つ編みにして作ります。こちらの3枚の紙で今から三つ編みを作ってみます。」

・スタッフ A、パネル持ち。

・スタッフ B、実演。

・スタッフ C、各班 GL に三つ編み用藁を配る。(芯はまだ濡らしたまま)

MS「まず左の藁を、真ん中と右にある藁の間に持ってきます。次は右の藁を真ん中に持ってきます。そして、今度はまた左の藁を真ん中に…というように、左端と右端の藁を交互に真ん中に持っていくと三つ編みが出来上がります。このとき、藁を折っていく感じでやるとうまく出来ます。では、実際に作ってみましょう。」

#### ▼三つ編み

GL「三つ編みには今から配る藁を使います。」

・湿らせた3本の藁を配る。

GL「編み始める前に、藁を指で潰します。潰し終わったら、机にテープで留めます。このとき、藁は机の端に留めるようにしてください。では今からテープを配ります。」

・机用テープを配る。

GL「留めた人から三つ編みを作ってみましょう。」

(三つ編みができない方)

参加者が手に藁を持った状態で GL が「左の藁を残し2本の間に持ってくる…」と口頭で指示を行う。または参加者の手を持って説明を行う。

GL「編み終わった人は、編んだ端もテープで留めましょう。」

・端用テープを配る。

・全員の完成を確認。

2:12

#### ▼取手の取り付け

MS「では、出来た取手を本体に取り付けます。」

GL「はがきタイプと袋タイプの人で取り付け方が違うのでよく聞いてください。」

GL「はがきタイプは本体の一段目に藁を挿します。挿せたらテープを剥がして、藁の芯で結びます。反対側も同じように結びます。」

GL「袋タイプは布の結び目に藁を通します。テープを剥がしたら芯で結びます。次に反対側の藁に隙間を作って、三つ編みを挿します。最後に芯で結んで完成です。」

GL「こちらにやり方の図も用意したので見てください。では、やってみましょう。」

・参加者のウォールポケットを使って実演。

・スタッフ C、芯を配る。

・取り付け方法の図を配布。

(結べない場合)

スタッフが結ぶ。

(取手の藁が過ぎている)

GL「この藁の長さを揃えと綺麗になりますよ。」

(布のほつれが目立つ)

GL「糸のほつれを切ったらもっと綺麗になりますよ。」

・取り付けが済んだ方の作品を見て仕上げの作業を促す。

2:22

#### ▼片付け

・スタッフ AB、鑑賞用ボードの用意。

・スタッフ C、鑑賞スペースの掃き掃除。

MS「では、時間なので途中の人も手を置いてください。」

MS「完成した人から作品を前のボードに掛けていき、終わった人か



【図15】 藁の切り揃え2



【図16】 裏打ちした布で端を挟み込むように接着



【図17】 大型模型で三つ編みの説明



【図18】 一方をテーブルに固定して藁を三つ編みにする



ら机の周りのゴミや使った道具の片付けに入ります。片付けの方法ですが、使った道具は自分のかごに入れて、ゴミは用意されているゴミ袋に捨ててください。では、始めてください。」

2:25

## ▼鑑賞

MS「どのグループも綺麗に片付いたようなので鑑賞会をしましょう。こちらのボードの周りに集まってください。」

MS「皆さん、いろんな形や色のウォールポケットが出来ましたね。自分や他の人の作品を見てみましょう。せっかくなので誰かに感想を聞いてみたいと思います。」

MS「このウォールポケットを作った人は誰ですか？」

MS「〇〇さんですね。」

MS「このウォールポケットはどこに掛けようと思いますか？」

MS「(台所に) 掛けようと思って作ったんですね。実際に台所で使える素敵なウォールポケットが出来ましたね。ぜひ使ってみてください。ありがとうございました。」

MS「なぜこの布を選んだんですか？」

MS「色の組み合わせを考えて選んだんですね。仕上がりが上手いって、とても素敵なウォールポケットになりましたね。ありがとうございました。」

・全員拍手

## ▼まとめの挨拶

MS「今回の活動では身近な素材の藁と布を使って、より美しく使えるよう工夫したウォールポケットを作りました。こうした私たちの暮らしの中にある道具の美しさを紹介した人が、柳宗悦という人でした。今、美術館で行われている企画展『民藝 - 手仕事の美』では、柳が愛したたくさんの民芸品が展示されています。今回皆さんが作ったウォールポケットや企画展の作品から、民藝の良さを感じてください。」

MS「今回のワークショップはこれで終了します。本日は『職人技を手に入れよう！ わらで手作りウォールポケット』にご参加くださりましてありがとうございました。」

・拍手

MS「グループリーダーさんから作品を受け取って、気をつけてお帰ってください。」

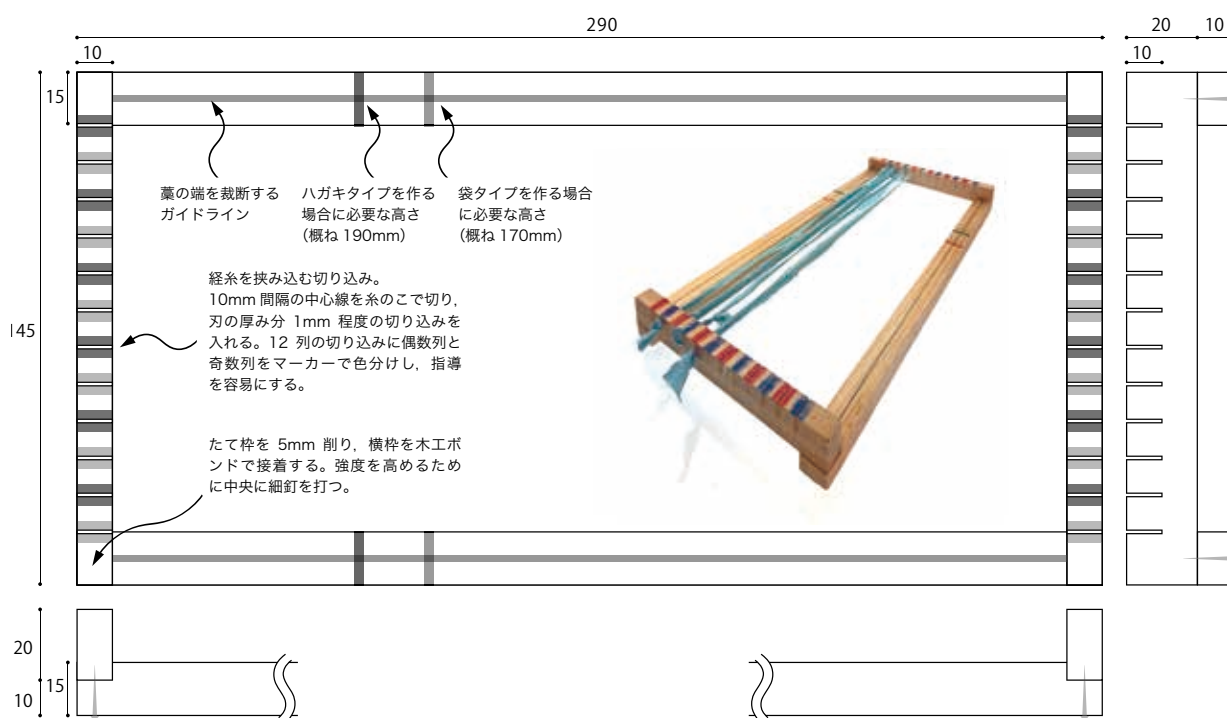


【図19】 鑑賞活動



【図1】 宣材用写真

[表5] タイムライン 5



【図2】 簡易織り機の設計図 (単位 mm)